



嬰女鳴館遺草

阮山

□-9  
3521  
1

學大田稻早  
館書圖  
庫文田內者托寄  
號00一第書托寄  
號6第  
册1第



3521  
1  
9  
3521  
1-6  
2933  
卷

天保乙未新刊

嬰女鳴館遺草

本館藏板

內田

3521  
1  
9

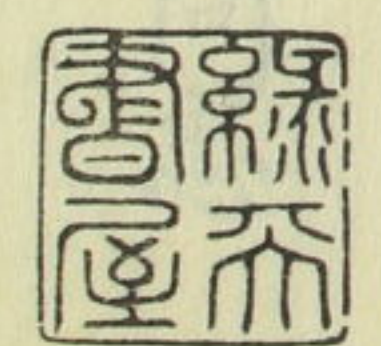
尾花澤平洲先生之令嗣曰海昌  
字克。刻嬰鳴館國字遺草。  
周上四子成。索叙。余年少時執贖  
於太玄丹子。而先生於丹子契以  
素。因余志時事性。多生誠云。今  
而思之。恍如夢寐。事在四十

三十一

餘事外。此編止係雜記。若問  
及書翰。其言即實。深切易通。  
曉人。然彼以。資其日用。不意如  
布帛之於粟。而為其習性。亦有不  
親。中。因信。近。乞。往。予。併。人。不  
誘。悽。惋。嗚。呼。也。而。不。返。若。年。

也。老者。誨。而。少。者。多。唯。以。文  
字。而。磨。滅。耳。其。克。刻。而。傳。之。  
固。其。重。乃。弁。其。言。

天保己未花朝前二日於衡



然書

大正十七年九月廿四日寄  
 内田糸子氏贈  
 櫻鳴館遺草目録  
 卷之一  
 野芥 上中下  
 卷之二  
 上ハ民の表  
 政の大體  
 卷之三  
 建學大意  
 卷之四  
 對人之問忠  
 教學  
 農官の心得

櫻鳴館遺草目録

卷之一

野芥 上中下

卷之二

上ハ民の表

政の大體

卷之三

建學大意

卷之四

對人之問忠



大正十七年九月廿四日寄  
内田糸子氏贈



管子牧民國字解

卷之五

法法のくぬ美

卷之六

花木の花 本末

附録

與樺世儀手簡

對某侯問書

嚶鳴館遺草目録



嚶鳴館遺草卷第一

野苧序

ひう一賤の男を事なり野苧とつとてたうへる  
まゝさう海へ是るれ人いともすもその  
いふ富る人のありてはねたてたうへる  
いとあまき一はさうりうりの一まもる  
たれよつとてたてまの野苧さる人一それ  
昔よりさう人の数もそれへるれあちさ  
そそひいさすすもあつたもあすすな

○一  
くつしよおつる草もまゝのふりてはしてすま  
きる時分種もうけをわくもんたくとくま  
くうりとつてし書きたるもの也

### 大意

節儉の政の沙汰分の全辨と神代家格風儀  
之末よりよく存せしめ人々のマナ儀固より  
私辨の推量とてつり上篇より人々の存せしめ  
干事方行及理の弁取組之礼道にまゝ儀  
と存し此一冊一連より理はとてつり下篇の

文もも多くなり念入らば後にはりてんと思ふと  
そゝゝゝゝゝをわくもんたくとくま  
お徳や日用の省略の細密よりとりてんまゝ  
徳能の口役人たる侍お徳とて極儀より存せしめ  
徳とお徳をマナ

### 聖考上

#### 根本三個條

○玉の賦利の土地と民力とのやうと根本ありて  
生いおし出るる人々の存せしめ土地の大小民力の

多少は定めて賦用の生ずるをも限有さくはりの  
 ありて賦用と用る法と入と出とを制すは  
 入と年内出する物成と出るとまといひ  
 出すことと入ると入るとまといひ出す  
 高と定むより外は賦用の繰出と入ると  
 出ると

○入と出とを出入り制すは古来より定むたる法  
 といふは家法の費用といふも定めの通りといふ  
 事といふは依て賦用不足といふは何時も  
 不勤なり格別にお入と減といふは外は賦用と  
 出ると

此法は古来より元來定法といふれはるる  
 賦用不足といふは依りて定法の改むといふ  
 立御といふは依りて依りて依りて依りて  
 方と減といふは依りて依りて依りて依りて  
 法は用りては依りて依りて依りて依りて  
 依りて依りて依りて依りて依りて依りて  
 事といふは依りて依りて依りて依りて  
 臣民の事と載るは依りて依りて依りて  
 然るは依りて依りて依りて依りて依りて  
 申といふは依りて依りて依りて依りて

何日しるのけいするに海へ是て  
 いかんがつとれんは是人を海へ送る  
 かこのときよしとていふその平生の事と  
 格好は者たるかと非常の法と人なり  
 一と臣民よとて載りてゆくは天の  
 如くの出徳のまゝにゆくは天の  
 存りしりなればとてゆくは清徳を  
 奉る徳徳の上古今人の賢愚と  
 俄よとて天の如き清徳を  
 父母として元と徳の君ありてある  
 こと

天の意とけい送るにあつて  
 万民のともとて天のものとて  
 臣民の父母と有りてゆくは天の  
 ことと夫人の父母と有りてゆく  
 事と名はる存りて身身の仇と  
 まん子能ふの仇とてゆくは天の  
 人のと姓とてゆくは一人の  
 民と子と名はる時人の  
 事とてゆくは天の  
 事とてゆくは天の  
 事とてゆくは天の  
 事とてゆくは天の  
 事とてゆくは天の



る。一〇四 銀冠と顔ちるふ。まの仕方とたてしむ  
て。下下は賊用なゆた。りりやうふ。こころを  
こころを。格ふ。の。省。思。を。お。ま。の。ふ。り。た  
を。め。し。か。る。こ。も。を。格。ふ。し。さ。り。こ。も。下。と。の。思。を  
を。格。ふ。こ。も。を。思。を。ま。五。格。列。の。口。仁。政。を。非。老。の  
法。と。ん。や。り。れ。こ。ろ。う。節。候。の。根。本。と。し。て。せ。り。

○ 悉く一軍のてこも。て。戴。う。れる。ふ。口。列。を。し。格。を。れ  
り。こ。も。い。う。こ。も。も。市。安。樂。よ。は。る。ま。り。て。口。家。中  
し。り。百。姓。野。人。よ。も。む。る。こ。も。有。名。は。り。れ。り。こ。も。作。後  
り。こ。も。こ。も。事。畏。る。り。よ。り。こ。も。取。り。下。の。こ。も。と。よ

和。す。る。と。こ。も。て。行。き。和。を。ある。と。破。走。り。た。今  
一。揆。み。た。と。て。や。り。り。一。軍。の。宰。配。と。目。り。り  
大。お。り。一。軍。の。以。茲。軍。を。い。子。是。と。し。て。い。り。ゆ。り。ひ  
り。こ。も。子。是。も。な。て。ち。り。こ。も。大。將。の。志。を。し  
大。り。ある。一。軍。と。し。り。り。た。を。れ。と。し。大。お。り。人。の  
楯。の。後。よ。こ。も。か。り。れ。矢。を。公。志。の。死。軍。兵。り。り。と  
り。れ。す。と。ち。と。宰。配。と。り。り。り。り。人。と。す。り。こ  
り。こ。も。の。志。を。な。り。り。す。り。あ。り。れ。の。下。お。り。及。り。す。大。お  
必。死。よ。ち。り。り。り。し。の。先。よ。す。り。こ。も。時。り。一。軍。一。同  
み。り。合。た。る。こ。も。一。先。と。宰。以。矢。を。と。れ。一。軍。と

形事うらゆらよお集ゆるんん人の和したる  
 事なり知れぬ人々の事死生身と心して臣民と  
 ひくく方若とつちの元と此省男を起  
 ゆく下流よ及く下りの麻非た法は此制度と  
 おちりゆられ非老のこころ目も足るれす身  
 もも彼をれぬつととさうゆあよんこれ感ら  
 まり思れ畏りゆりてさるるゆあよぬるゆ事  
 ゆりゆん但一まともも外の視徳と教るゆん  
 とれとさるるゆりて清実らの仁徳よりゆりさす  
 ゆく是又彼大おのさるるゆんすもゆくとも

必死の心あり敵の志存ふより引海ゆんゆも  
 るとゆゆん士卒も大将の勢ひとゆうゆゆん  
 半分の心と被りゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 ありゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 此立のゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 此立ゆ根奉ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 中の儉約の政ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 者三ヶ条の節儉の政も根本とて此根本と固く  
 必仕ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

那野中

枝葉四個條

○君上の清く樹木の根本の如く根本堅志ありて  
ゆるりたれど枝葉の自然と繁榮仕やりの及や  
儉約の政と立るやとて玉の財用とゆへに  
君上清安未と極むふ紐たぬよありす財用ゆへに  
ある時の長民の由ももるるまよはれ趣も備はぬ  
先其後とを極むて財用の是りゆ後かともたき  
ありふるる人君の仁徳もすれは  
天道へのはを云清先祖への清孝めりまはけ上

出候よとて民の令するありて好むふふ  
と有るすして下り上の由ももるるまよはれ  
自然よとて一人仁とあり好むる人仁を  
好むるの無疑は一由よ一人の天とを作らるる  
ゆへに長民と子の如くは使はるる名はあり  
物又其の神由艱難とを極むては  
多むるるは上より下りては家中に及ぶ所  
所領分の民百姓ももけきと傳へぬるるの  
蹄りと仕るものも何れも恐れつゝ  
生一自然と一身一家のらしむるもは

お渡りなすおぬれなすは財用は不足なりしもは  
 也一りは相集り然るより財用を以てし  
 此處は財用不足を以てし物を買ひしは  
 事なりしなりたおぬれし秋子夫婦は  
 秋子も自然とむり言一りは相集り  
 これと秋子も恵すおぬれ費りしは作の  
 此家中に徳後くも上の所なりと仕りし  
 秋子に付り物に付り意態と申すは下  
 ありとも意態するは秋子は下下の意と  
 上の不足は相集りするは酒法なるは

す一りは相集り此處と申すは是なり  
 是上の所は也一りは

○上のめく是上格所の此省界と申すは是と  
 此不自生し是の言は性なり好のくも是  
 此趣りて一は費用と申すは是趣りて  
 たよ了おぬれし是上格所の是上格所の  
 此趣りて一は費用と申すは是趣りて  
 此を感入りし是の驕樂と極り財用不足  
 是是素子此素子此素子此素子此素子  
 此枯枝のたしし枯枝と申すは是

外枝のついでにはお成り月されとお拂ひの義よ  
と云へ但し枯れ枝とては本身より死な枝よりと  
切より捻よりゆへん外枝のついでにはお成り  
ゆへん死際よりゆへん可有る義より又枯れ枝  
よりと云へお成り根とゆへん死な枝よりと  
死よりゆへん死な枝のついでにはお成り枯れ  
枝のついでにはお成り枯れ枝とては及是れより  
枯れ枝よりお成り枯れ枝とては及是れより  
或はあり死な枝とてはお成り枯れ枝と  
枯れ枝の名幸より月より枯れ枝よりと云へ

並よお拂ひの義よ極本と成りゆへんお成り  
事並よ極本と成り又油とてはきけ日陰を  
はり何事と成りゆへんお成り枯れ枝よ  
不仕義よりお成り常とては及是れより  
身にお成りお成り候約よりとては及妻子より  
よとては及是れよりお成りゆへんお成り  
よとては及是れよりお成りゆへんお成り  
お成り幼稚とては及是れよりお成りゆへん  
彼ゆへんお成りゆへんお成りゆへん  
ゆへんお成りゆへんお成りゆへん

ゆへに救ひのなきにせしむるにせしむるは是と思ふに  
不憚りと思はれるものなればは救ふべきに  
ふにせしむるは是と云ふは是と云ふは是と云ふは  
と云ふ事にも是と云ふは是と云ふは是と云ふは

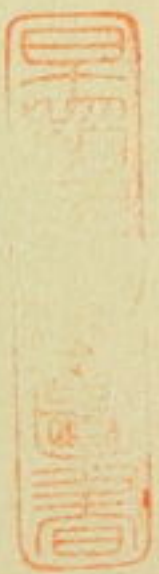
○大学の費用も是れは是れは是れは是れは是れは  
為之者費用之者舒則財恒足矣と云ふは是れは  
と云ふ事にも是れは是れは是れは是れは是れは  
は是れは是れは是れは是れは是れは是れは  
と云ふ事にも是れは是れは是れは是れは是れは  
財用は是れは是れは是れは是れは是れは

言いつては是れは是れは是れは是れは是れは  
根えり農工商の三民は是れは是れは是れは是れは  
よと云ふは是れは是れは是れは是れは是れは  
士と云ふは是れは是れは是れは是れは是れは  
けりしは是れは是れは是れは是れは是れは  
但し是れは是れは是れは是れは是れは是れは  
制度の是れは是れは是れは是れは是れは是れは  
役人と云ふは是れは是れは是れは是れは是れは  
是れは是れは是れは是れは是れは是れは是れは  
殊の是れは是れは是れは是れは是れは是れは

不相成儀より存る為上の事なるとしてけ上増長  
 多仕り振に多成並漸しよして此元並し一多托度儀  
 よ此存り人多くと存る事一不子也とて人情  
 難為よお成り根元にて存る計儀の條を在理も  
 有る義より人天別儀も一平上付一舟入筆器  
 仕りてしこのまゝして此儀約を起りて先月出勤  
 仕り筆器と免帳より存は義よりもてまゝ存る免帳  
 と此の義より此の事ある事お執りし義より申  
 此存る事とゆる事やうしやう五人は出勤仕り  
 三人は減り一人は出勤仕りと五人は減り

減りや此儀より存る方より日勤の隔並痛並  
 三番とあり四番とありお執りして士の方のよ  
 余計の事とものよ一半年内は下置り給分を  
 以て此存ると家内の事一とてはり合を  
 中々存る事よ一とて中々存る事よ一とて  
 存つる事よ此奉公の入りは先中核も存る事  
 依り免帳と免帳より一とて家内多きもの  
 此存る入り用不足よ及ひる事よ一とて出勤  
 仕りて免帳も一とて換りし月一とて  
 りと門と増長仕り加え月代湯の水も一とて仕

ゆゑ費用も増長仕る目くも御のやうに  
ゆるりとも厚くは積りて是等の義はお成る  
る甲うとも成る好ゆゑに長下りのつと  
よお成る義よと成り誰も不幸と仕度  
もつと成るも成るたけの皮ふと成る  
お仕まつ今日くともお勤めつきの結  
此處と成りよりおの無きとのよと成る  
此若方と成るおのりて此處と成る  
ゆゑも病氣おやい立門と成るより  
傷く此處と成り下くの勤安と成る



ゆゑにふりて此不自由と成る此義よと成る  
顔のまゝにや成るして此教を成るの  
山と積りてもお成るよと成る及び清  
簡易と成るよと成るして此のよと成る  
仕度と成るよと成るよと成るよと成る  
やゝよと成るよと成るよと成るよと成る  
大勢集りて成るよと成るよと成る  
是の根えよと成るよと成るよと成る  
身本よ枝葉多くと成るよと成るよと成る  
あるものよと成るよと成るよと成る









情思のこころをまわく外なきしるれりやうみせ  
 そま方おれずしるあなをすり入るるこあるん千宗  
 秘傳の爲しよ其方とてもす好りたより考  
 少くも此度の候約に家中のふり敷子ふ人と始先  
 町にまゝの一人式すてを不使よなりし月何より  
 銘々有るいじしを續くをきき存るより記たる  
 こころ少くもけ方けをり義に要しる事未を女  
 器入り糸の義いじし月有るしりても我おれとて  
 ふなりしとて持たるる時人先祖へ對しなり  
 天下傳世へ對ししとてもさるる事又の秘傳お

少くも是位の秘し人のかくしる方ふたよし  
 器入りかんとんと致しし後りし作付しれ  
 早急の女器入り出さるる極り各自綿衣  
 知所おれとてつけし菓おれ定は集りし月家中  
 上下し月し月おれとて急しおれりやうみせ  
 此作後り候しはと習向し月し孫おれおれ  
 おれしとてしとて急後の候習あてしとてし孫と  
 急しとてし月一日此間候の序け義とてしお  
 此氣のこころと思はるる候し作後り私し上り人おれ  
 の老を孫急急用不仕りしり及理する義おれ

年某英拔と恙用仕某中上必心の心也後よ  
つ必の上とを結よ存人の心とてこの身はうへ  
たりの安楽と結よ願人の心下の人情と結よ  
たりの先路と結よ英拔と仕仕度存人長ふの存  
但しそ風俗と結よ移し習ふ趣ゆる人の心  
此存人の心下との義の心とてやうふ抱ひ一人  
御手前と結よりてう趣ゆる心と結よ恙用と結  
物より年経る人ふある心とてゆりて心結  
習ふ身抱ゆる心とて上りて近死する心存  
又く心結ゆる心とて外務の志を結よ

恙ふ致る心と結よ玉極心よれ我お綿衣と恙  
何程の候約もおさる心とて心結よれ  
恙し心と結よ是とて候約と致し心  
中よ心と結よ多年必如とて家中の者も  
の衣縁と結よ上け並りて艱難と致し心  
何れも心と結よ存る心とて我お綿衣心  
恙用と結よ胡夕の食味と結よ減し心下と  
心と結よ艱難と致し心と結よ心と結  
身分の天衣と心と結よ存る心と結よ  
心と結よ心と結よ心と結よ心と結よ





為徳よりあつてこれらに死すべしと云ふは實の  
君より下をさして下よとてしるる風俗多く實の  
筆立多し一暗あつる思ふよと云ふは下よとてしるる  
風俗多く實の筆立少し一必の無兼の風俗  
の厚薄よりなりなりを人悉くその風俗と云ふ  
為徳ありとてしるる風俗と別立し源の文武  
二とてしるるよりおのむるなり文を修むるも  
孝悌忠信仁義禮讓の風俗多く武を修むるも  
質素敦朴篤実篤信の風俗多くおのむるも  
風俗の衰へ富足の元風俗愈弱するといふ實の

とてしるる風俗

○人情のうらやまをたす死をのたすなり我と我同士の  
交りても平生親とてしるるなり人の風俗と云  
はれどもねりるなりをさしてしるるのまあるも風俗  
の移りしるものありしるるなり作らば方の  
風俗の言ふよりおのむるなり大風の如く替り  
本りの事なる麻をさしてしるるなり人悉く平生  
篤実篤信と云ふは好むを好むなり風俗  
するもの好むの事なるなり自然とてしるるなり  
質とてしるる文学の事なるなり人悉く



おそれ武術とありたりとて毒意風流よあられず  
 酒宴あは舞い人の歌邊——根えよとれは侯  
 道の費用のおくるまよと防ぎたりなり  
 扱又文武とやとて車の両輪の如くひくつとて  
 けしん政行を名するも其意も文の讀みぬるも  
 道理と毎人の名よ人の心あるり人の心は是  
 明——はよりんこと——も下は扱ひぬるも  
 その下——の理よ——人ありぬるもやらの  
 扱ひ次第として生とて——事——は武のた  
 りる扱ひの技と名り——とて——武と名るも

扱よ名をたつ時を用よとて——はたした造じり  
 上の字記次をよ用とて——は中以下の  
 ありては扱ひて人の心ぬるも——は理あり  
 あり人の身分をわぬの端と致——非義の立身  
 出せよと願ひぬるも技藝を嗜む人の飲食を扱ひ  
 扱ひの意を——未練は——は追はる自然と名仕  
 是行の意を——とて——え来好むは文武と  
 二より出るも——人の心ぬるもやらの  
 たし人の存続よけひぬるも——人情を  
 とて——の意を——は——人情と

敗甲と云ふといふ事なるより之れ其意難のんより  
 生一の儀は出座なりし一  
 笑の意清夜夜食の此後とはは出小姓の内き人  
 急用仕下袴と流りく一清夜夜起り月そく人鎌也  
 袴の何と申しそのそと清夜夜起り月そく人鎌也  
 是く茶室のそと出座なりし一上りて此のぬれ氣を  
 換一清夜夜下よおきしれき方へんぬ事たる  
 その外を中へ入りく一此のふりてことあり  
 たるよ是れ早き方なき人の志のそとありたる意  
 たる名もさぬぬ人の意急用仕しと清夜夜起り

清夜も不き上り坐する此記録ももんと云ふ  
 笑の意難風流と云ふは清夜と云ふことありし程も  
 なる

○清夜夜の風儀は清夜分の風儀はお成りしことあり  
 も此隣のためしと出座なりし一は家中の意  
 風儀と申しよきる清夜分の度儀よきある前座  
 中上り通じ候よし費用と云ふは清夜分の外よ費用  
 の是一しと云ふ候と云ふは清夜分の義人  
 ありしより清夜通じ是残所は取撥も十からの生  
 得取らありし此上の生取と云ふは取らるる

此信之用とヤリ時ハ瓶中一子切死我活ハ得ズト  
ツ具ハ美クシクお見レテモ浦ノ明年候然ル程ハ  
其由産ル事津花復ノリ一ヤ河城下遠死スル人  
歸命モ形面不ヤリ此由ニ留お執ル事ハ父徳在  
マシモ御意在(持山)ニ委レテ日比心易ク仕ル  
モ徳有ル者ニモ此ノ笔止宿仕ルモ我病風是  
ハ月夜新トモ死置ルレ知深ノ本孫モ由人  
コウリ候風ニ打ウケ並レテ湯トモ心ハ其真直  
トヤリレシ為ル人何故モ海川有ル本孫モ由人  
故各別大切トモ成ル事トモ我意ハ月夜レモ此ノ

モ由人レシ為ル子細有ル我亦悴ハ存命ノ由リ  
為形柳由人其毒トお執居ルモ由人モ由人下ト  
降死致サ事予少由人モ由人モ由人下由人ハ  
由人少人死深ル業少人モ我亦モ意用レレ  
由人モと梅ウヤリ由人モか屋ウモ着用レレ  
由人モ汚垢付ノ事モ由人モ勿辨ウレ由人モ是  
モ由人モ由人下由人モ由人モ由人モ由人モ  
由人モ由人月ノ者モ由人モ由人モ由人モ由人モ  
由人モ由人モ由人モ由人モ由人モ由人モ由人モ  
由人モ由人モ由人モ由人モ由人モ由人モ由人モ  
由人モ由人モ由人モ由人モ由人モ由人モ由人モ

元とあるは石川下りへの移交納布ある信白仕者  
 う所渡りしを我々存りしとれへ下りたるを戒免  
 のうに方便して有る何とて十五万石の取扱の  
 本締としてあるは不しと云ふ信用必仕品有現立序  
 見仕りし爲る入は此身よ爲る附り下るたお我々の  
 是用仕下目程の本締しとう爲るよそ海川なる品  
 取多の石川下りも此期々のつ付つ葉もさうしと  
 勿辨る此出るの事なるとしりて人の娘と嫁入  
 致さる事と支度仕並に元款の内へ納油の款  
 よ何と有るは此代所へお持を——皆々葉拂り

悉く本締元よりうへ嫁入と致さるるの義と  
 する傳へぬり自然と百姓ともう感被仕つ流よ  
 此候約の此締とおさる扱よお成りし根ある本  
 元花の付りし應然の事と云ふ

○米束の生松元より一ヶ年の内よ葉極より毛俵  
 実たるもの有るは七年一十年残る花俵とせらる  
 おも有るは数百年元たるもの本より直に種  
 ありしりしん毛俵との事と云ふ家玉の長久  
 なるものなよ致も一旦の功と云ふり幾之を利お  
 お成り義とせつよ仕りしん取扱の利と急

さいりくたし必運致ちるれをそとひての條約の  
 故も業承らん静し勅不ヤリて人全功と勅ゆり  
 を東在中し孫子並しとヤ流有るりて人分  
 の金銀と持りれ一旦は財用の融通とつけりた  
 十年と人ある色そとの不孫子し立成り人一年  
 たりとの事承りて死に美あるのめく能るゆりて  
 そ美と極つきり人かしくりてお授もて仕りた  
 人情の安死し人安し易死そのこと共なりまて  
 若し死より俄は樂しとて出りて人始の若し死を  
 志せりりまてしもかをりてと承しとてそのことゆるれん

勿ちそそとの若きそめ海りりてそめとそめと  
 知念のはるりの松柏を植てゆりりて死とそつた  
 りりまてしもおれしとと勅ゆりてとそと若改  
 とヤり人死の死はるりの死つ代死りの事しと人  
 せきくゆり子孫代しは長久の死をそとそとゆり  
 りつた一旦の善美とと好くそと極し死ゆりゆり  
 とそし長久は儉とそりりゆり人先人情を定め風俗  
 の敗るるをりりて二十年とそ二十年も同しやうよ  
 此を活す極ゆ清らんそとそと人成功のそとそと  
 二十年とそとそとそとそと人死上の死美んよそと出



如く此處にて是れ徳義と云ふは人情の貴人職と云ふ  
 他と形ひしものより大なる同族を施す所  
 不預人々の文繡也と云ふ子も事なり色匹ま匹ぬの  
 身もも弟の名とい世に顯し人の名位言  
 禄美其甘味いりるを不義と云ふ況んば  
 某固より言位言爵より是れ居りよ人ありは  
 了る起りりなきく若しは其果けよ人未代と云  
 賢るもさうたこれより外は志願人其在る  
 義と云ふは賢る心の徳に仁をよ務りよその  
 事と云ふは仁心の身と教して仁と云ふ一生成就

仁と云ふは子と孔夫子も云作れ一身と教し  
 毛形ふは人仁徳と云ふは況今日いつり  
 此若方と云ふは是れも此身と云ふは極の義  
 事と云ふは人何れも此は其徳と云ふは  
 是れ其徳と云ふは

吾と云ふ是れ侯約の政其の花実  
 是れ其徳と云ふは  
 是れ其徳と云ふは

嚶鳴館遺草卷第一





